◆分科会コメント⑤◆

「現代中国とアジア世界の人口生態環境問題」研究会コメント

榧根勇
＜愛知大学＞

●榧根―　また出てきましたが、私は出たくて出ているわけではありません。今日はディスカタントとしてどうしても出なさい、というのが加々美さんの指示です。私と加々美さんはけんかしているわけではありませんが、今日はようやく論争できる場ができたかなと思って喜んでいます。もしグローバルＣＯＥが始まるようでしたら、最初はK-K論争から始めたらどうかというのが私の印象です。

最初にまず確認をしておきます。それは私が最初にお話ししたのは、ウィルバーの四象限の枠組みがあるということ、これが１つです。しかし、私は環境の視点から、ウィルバーの考えに同意できないところがあります。ですから、私がウィルバーの枠組みを環境問題に適用したとすればこう考えますということです。そこを混同しないでください。

もう１つは、私が提案しようと思ったことはウィルバーの四象限の枠組みのなかで、中国学を考えたらどうなるのかと、果たして中国学は成立し得るのかと、それをお話ししようと思ったわけです。そのために18枚のスライドを用意してきたのですが６枚だけお見せすることにします。

認識論と存在論の問題が出ましたが、私にはよくわかりません。おそらく神学論争になると思います。もしも存在論が、加々美さんがおっしゃるように時間軸と空間軸をネグレクト（neglect）したということであるならば、入っています。残念ながら。いえ、幸運なことに。それはあとでお話をします。

それではまず空間軸の問題について。私は地理学の出身ですから、空間の概念を嫌になるくらい議論してきたわけです。私たちが大学で育ったころには、科学の母を自称していた地理学がありました。私はそう教わりました。それが自然地理学と人文地理学に分裂し、自然地理学分野はさらに物理学的でありたいと努力する過程で、さらに細分化されて、現在は再統合の過程にあります。人文地理学も同様の経過をたどってきました。

再統合とは具体的に何かという証拠を出すと、現在、日本学術会議のなかでは地球物理学関連研究連絡委員会とか何とか、要するにばらばらになったものをもう一度くっつけないと人間の役に立たないのではないか、ということをやっているわけです。これは世界的にそうです。

それから、地域研究についてお話をしますと、地域研究の研究者は独自の学問分野の確立を目指して日本学術会議に地域学研究連絡委員会を設立しました。ちょうど設立したときに私は学術会議の会員でした。この設立の議論に関与しています。そのときに、言い出したのは、おそらく板垣雄三さんだったと思います。板垣さんの専門はアラブ学ですし、歴史の方です。私はこういうことを聞いたとき、「歴史の人もやることなくなったんだな」と思いました。

ところが、それで地域研（地域研究企画交流センター）ができました。そこで松原さんが所長を務め、私が議論に参加したからかもしれませんが、1995年からしばらくの間『地域研ニュ

ース』が届いていました。私に言わせると、それを読む限りにおいては独自の研究分野を確立し得たとはいえません。依然として努力の過程にあります。ですから、現在中国学も努力の過程にあるわけです。

以上の経過を、私なりにまとめると、それは 20 世紀型の科学の限界を示しています。地域学をつくるのであれば、新しい地域学をつくらなければいけません【図表１】。それをどのようにしてつくるのかということをお話ししようと思ったのですが、そのような話ではなくなってしまいましたので、言いたいことだけを言ってやめることにしようと思います。

まずケン・ウィルバーの枠組みはご存じだと思いますが、私はＣＯＥが始まってから知りました【図表２】。ケン・ウィルバーのなかに時間軸がどのように入っているかといいますと、彼は四象限のなかの各グループの人は努力しており、独立してかつ螺旋的に発展すると言っています。その独立して螺旋的に発展する過程のなかに時間軸が入っています。しかし、独立して発展しているだけだと。内面的なものは内面的なものだけで考えています。外面的なものは外面的なものだけで考えていますと。

システム・サイエンスとは経済学や社会学のことです。ハード・サイエンスとは物理学とか神経学とか生物学です。そのようなものは、他と相互に何の関係もなしに勝手に動いていると、それをウィルバーは指摘しているわけです。これは枠組みを示したもので、万物は全部この枠組みの中に入るといって、彼は『万物の理論（Theory of Everything)』を書いたわけです。これについての科学的な裏付けについては、アービン・ラズロー（Ervin Laszlo）という物理学者が書いています。

それから、先ほどの地域の問題を扱うときにも、当然、空間軸は入っています。時間軸の個人史の話をされました。溝口先生はお幾つかわかりませんが、私は昭和７年の生まれで今 74 歳です。おそらく同じような経験をたどってこられたと思います。戦争の前に生まれて、戦時中は食べるものもなく、学校に入って、敗戦で価値観の大転換がありました。教科書に墨を塗らされました。それで何が正しいのかということがわからない段階で、大学に入ったら物理万能主義（物理学帝国主義）で、「物理にあらざれば、人にあらず」みたいなことを言われました。そのような状況のなか育ちました。アインシュタインが亡くなったのが 1955 年ですが、それまではアインシュタインは量子論に反対をして、決定論の枠で自分の体系をつくろうとしたけれども、できなかったわけです。そして、その過程で、だんだんと量子力学が認められるようになりました。しかし、それでも 20 世紀は依然としてデカルト的な二元論の枠組みのなかで学問の体系はつくられてきました。

ようやく納得のできるようなものが出たのが 21 世紀に入ってからです。私がお話した新しい哲学は量子力学に基づいた哲学です。ですから、私はデカルト的な二元論で築かれた現代や近代という世界や、現在の経済システムは、せいぜい 300 年間の人類が犯した間違いだったと思っています。

私が言っている新しい社会システムは、別に中国の体勢が変わるということではありません。日本もアメリカもヨーロッパも全部おかしいのです。なぜおかしいのか、また証拠を出せというのならば、地球温暖化の問題をどのようにして解決しますか。このままでは人類滅亡です。それだけの真剣さというものを皆さん感じていないのではないかということを、私は言いたいわけです。

それからお見せしたいのは【図表３】です。「万物の理論」の枠組みでみると、地域の研究と

環境の研究は似ているのではないでしょうか。私はあくまでも環境の研究という枠組みで提示をしました。地域も万物に関係しているのではないか、地域のなかには人が住んでいますから、人の意識の問題を抜きにして議論しても意味がないというと語弊がありますが、入れざるを得ないわけですね。そうすると、中国学だったら中国人の意識の問題です。それで、地域の研究と環境の研究はともに万物を対象としているから、四象限すべてにまたがっていなければならないのに、ＩＣＣＳでは「私」という象限が抜けているではないですか、という指摘をしたわけです。抜けているのですから仕方がありません。

ですから、グローバルＣＯＥのときは、ぜひここでも研究会を立ち上げていただきたいというのが３つ目です。

ウィルバーは、環境と自然を右下象限に入れています。私はそれが気に入りません。これは明らかにデカルト的な二元論の影響を強く受けているからだと思います。ですから、環境というものは「私」を取り巻くすべてだと思います。「私」も環境かというと、「私」も環境研究の対象になります。環境は３つの象限に関係しています。そうだとしてもやはり「私」象限の研究が抜けているということです。

次にお見せしたいのは、アービン・ラズローの新しい哲学で、それは簡単に言えば非二元論です。汎神論です【図表４】。机にもイスにも犬にも豚にも心があるということです。ただ心の発達段階が違うだけだという考え方です。ベースになっているのは量子力学です。

ここに観念論と唯物論の相補性ということも彼は明確に書いています。どちらが正しいというわけではありません。両方ないと駄目です。それからもう１つは、それはいわゆる心と身体の相補性ということですから、これはまさしく東洋医学の考えです。中国の東洋医学だけではなくてインドもそうです。インドにはアーユルベーダ（Ayurveda）というすごい医学があります。まさしく東洋医学では、分けないわけです。

ですから、そのような問題で新しい哲学が元に戻るのではなくて、螺旋的に時間軸で進化しますから元には戻りません。戻らないのですが、やはり新しい考え、あるいは捨てるべきものは捨てていかなければならないということです。

先ほども情報の話がありましたが、情報についてはＣＯＥで非常に勉強しました。驚くことがわかりました。情報は英語では「インフォーメーション（Information)」と言います。「イン」「フォーム」です。だから情報は形態です。形態の導入です。インフォームですから形の導入です。

それからもう１つは、これは物理の人が 1991 年の『Physics Today』という雑誌に書いた言葉です。「Information is physical（情報は物理的存在なり)」。これも新しいというか、皆さん認めるようになりました。

もう１つは、情報はエネルギーであると、情報がエネルギーであり、物理的存在であれば、情報は everything です。ですから、『万物の理論』で情報が、四象限のすべてにかかわっているというのは当たり前のことです。

では、情報とは何でしょうか。現在の情報とはビットです。ビットはＡ or Ｂです。電子信号に直せば、プラス or マイナスです。これでコンピュータは動いています。ところが情報の最先端では何が議論されているかといえば、電子ビットでなくて量子ビットです。量子ビットは量子力学の考えで、Ａ or Ｂでなくて Ａ and Ｂです。

例えば、光を波的にとらえると粒子的なものが見えなくなります。粒子的なものをとらえれ

ば波的なものが見えなくなります。あるいは粒子の位置を決めれば運動が捉えられません。つまり観察する側の作用が、観察される対象に及ぶということです。観察という行為そのものが及ぶから、既にそこで粒子本来の性質はとれません。だからＡ and Ｂであって、Ａを選べばＢは消えます。Ｂを選べばＡは消えます。これが現在の量子ビット、カンタム・ビット（quantum bits）という考え方です。その方向で量子コンピュータも開発されているわけですから、量子ビットまでいけば、すべてが情報です。それが 21 世紀中にどこまでいくかはわかりませんが、そこまでいけばすべては情報です【図表５】。

ですから、私は情報というものをもっと重視する必要があるのではないかと思います。データベースを、単に情報をコンピュータのなかに入れたとかではなく、情報の本当の意味を理解したうえで、これから 100 年くらい先を見て、学問の体系をつくっていくしかないのではないかと思います。

これは、私は環境をやっているときに「環境情報基地」という提案をしましたが、これについては中国学情報基地の構築を、具体的には iccs.com という形で立ち上げようとしていますから、ここに全部の情報を入れれば、解釈学の解釈も情報ですから、解釈学の情報として入れて、その情報基地から情報を引き出したものを解釈して、その解釈を情報としてインプットし、このようなかたちでいけばベースは整うのではないかと、これが私の提案です【図表６】。

以上です。